

鉄の都



ゆらゆらと静かに揺れる波間を、一台の乗り物が走って行っていた。

ほとんど周りに波飛沫を飛ばさず、しかしなかなかのスピードで走っている乗り物だった。バイクという乗り物にも似ていたが、バイクとは違って地上ではなく海上を走っていた。

さながら、水上バイクといったところか。下部についている筒から空気がすごい勢いで絶え間なく出ており、その勢いによって海上を移動している乗り物だった。

その乗り物の主は、船ではなくその水上バイクで世界中を旅して回っている、旅人だった。船よりも水上バイクの方が、小回りも利く上に出発時間を気にしなくてはならないということがないのだ。

それに、水上バイクの方が走行速度が速く、移動時間を短縮できるというのも選んだ理由である。

ただ、水上バイクはガソリンの量に限りがある。長時間の移動をするにはガソリンを積み込まなくてはならないので、荷物が重くなることは欠点だった。

「おー。何か大きな建物見えてきたぞー。あれって人いんのかな」

乗り物の主が呟きながら、双眼鏡を手にする。どうも一人旅が長くなると、独り言が多くなってしまう。

建物は無人か有人か。有人だとしたら、旅人を受け入れてくれるのか。生活レベルはどのぐらいのものなのか。それが問題だ。

有人で旅人を受け入れてくれないところは最悪だ。過激なところでは、殺されかけたこともあった。

逆に無人の場所はお宝を掘り出すこともできるので儲かることもある。だが、無人になった理由によってはこちらの命が危険に晒されかねないので、注意が必要だ。

双眼鏡で見えた場所は、大きな鉄の塊だった。黒々とした巨大な鉄の塊が、海に面した場所に建っている。潮風の影響か、あちこち錆びていた。

鉄の塊は壁になっただけではなく、屋根にもなっているようだった。あれほど周りをがっちり固めてしまつては、陽の光が入らないのではないかと思つたが、それでもいい場所なのか。

「御だったとしたら面白い場所だなー。行ってみるかな」

アクセルを強く踏み、スピードを上げる。大きな水しぶきが太ももの辺りを濡らしていた。これは建物に着いたら乾かした方が良さそうだった。鉄の塊は海沿いには入り口はなさそうだった。港というものがそもそも存在しなさそうな感じだ。

なので浜辺に一旦バイクを止め、上陸する。上陸した場合、バイクは街の近くまで持つて行くのだ。一度持つて行くのが面倒で浜辺に寝かせて放つておいたのだが、浜辺に棲む生き物や通りがかった人間に何か細工をされたのか、ひどいことになっていて修理しなくてはならないようになっていた。たまたま近くの街には腕のいい技師がいたので直ったものの、技師がいない街だつて多いため毎度毎度修理できるとは限らないし、何より金がかかる上に面倒なので、そのような事態にならないように対策しておいた方がいい。

街の近くまで持つていった場合、街の入り口で番をしている人に頼めば大体見ていてくれる。旅人歓迎という街ならばタダで見えてくれるし、そうでない街でもいくらか包めば見張るぐらいのことはしていてくれる。人間がいない街の場合はバイクを持つたまま探索すればいい。

浜辺からぐるりと鉄の塊の周り全体を見渡すように回る。ぱつと見で入り口が見当たらなかったのも、もしかしたら入れない場所なのではないかと一瞬思ったのだが、少ししてその心配は懸念だったと分かった。

入り口は外壁と同じ色の鉄の壁だった。大きな釘が何本も打たれており、見る者を圧倒させる。怖そうな街だな、というのが第一印象だった。何か危険なモンスターでも封印しているのだろうか。

「……とりあえず、入ってみるか」

ぱつと入ってみて危険そうであれば、すぐに引き返せばいいだけだ。一応武器は常備しているので、引きずり込まれそうになればその武器で抵抗すればいい。

扉は見た目通りに重く、開くのにも一苦労だった。開閉のための部分も錆びているようで、開く時にギギギと耳障りな音をたてていた。

入ってみて最初に見えたのが、モニターをじつと眺めている白衣の男だった。視力が非常に悪いのかビン底眼鏡をかけており、そのせいで顔がはつきりは分からず年齢が判断できない。髪は薄い緑色のキャップのようなものにまとめて詰め込まれている。

医療に携わる者のような格好だ。もしかしてこの街では、ひどい伝染病のようなものでも流行っているのだろうか。

あの……」

「……ああ、入国したいのですか？」

入国と言うからには、この鉄の塊の中は一つの街になっているのか。確かに、国と言ってもおかしくないほどの規模の建物だ。

はい。大丈夫でしょうか？」

大丈夫ですよ。ですが入国前に、持ち物検査をさせていただきますね。この国では、銃火器類および刀などの刃物の持ち込みは禁止しております」私は銃を所持しているのですが、この場合は入国させていただけないのでしょうか？」

「いえ。出国までこちらで預からせていただければ問題ないです。では、こちらの荷物は一旦お預かり致します。あちらの男がボディチェックを致しますので、あちらの方へどうぞ」

入った時は男は一人だと思ったのだが、どうやら二人いたようだ。しかもモニターの前にいた男と全く同じ格好である。骨格以外は全く一緒の姿なので、少しだけ気味が悪い。

男にボディチェックをしてもらう前に、気になっていたことが一つあったので尋ねた。

あの、すみません。扉の外に私のバイクを停めているのですが、預かっただけませんか？外に置いていたら野盗に壊される可能性があるのです……」

ああ、大丈夫ですよ。あと、バイクの燃料は切れていませんか？もしよろしければお代をここにいただければ入れておきますが……」
本当ですか？お願いします！」

今まで預かっていくところはいくつか見たものの、こんなに親切してくれる場所は初めてだった。それに、ボッタクリというわけではなく一般的なガソリンの値段しか要求されなかった。手間賃もいらぬとは、かなり良心的と言えよう。

ボディチェックはいやに手馴れた手つきだった。この国には多くの訪問者が来るのだろうか。

入国前に注意したいことがあります。まず一つ目に、滞在日を決めてください。そして、その滞在日に去るようにしてください」
ほい。……ええと、今日から五日間、お願いします」

滞在日を決めて欲しいというのは、何か国の中でその日程分の用意をしてくれるのだろうか。
突然訪れた旅人に特別な用意をしてくれるこの人達は、やはり親切だと言えよう。

そしてもう一つ。これは絶対に守ってください。守っていただけなかった場合、その場で出国していただき、再入国はできなくなります」

先程よりももつと真に迫った顔をして、ボディチェック担当の男が言うてくる。

それはどこの国の中で守らなくてはならないことは何なのだろうと、唾を呑んだ。

「この国であつたことに、干渉しないでください。自らが危害を加えられた場合は別ですが、そうでない場合は関わらないでください。声もかけないでください。見なかったことにしてください」

続きは、のRコードからダウンロードしてお楽しみください。